

# 組織力で 競技力を向上させ 群馬高校駅伝界の 新風となる

## 樹徳高校

高校陸上  
男子

撮影●関根則夫 文●本川由依

現在、群馬県内の駅伝界に変革期を迎えている。全国高校駅伝競走大会都大路の県予選、例年上位を争うのが東京農業大学第二高校、前橋育英高校、中之条高校の3校なのだが、この2年間でその上位争いに食い込んでいるのが樹徳高校陸上部の中長距離ブロックチームだ。2015年には入賞圏外だったが翌年に4位に浮上すると、昨年の同大会では準優勝するなど右肩上がりでの成績を上げている。

チームをけん引するのは3年生でキャプテンの大澤佑介だ。昨年の都大路県予選では4区区間賞を獲得するなどチームに貢献。また、昨年のU18日本選手権800mで3位に入った大類康靖(3年)もチームに欠かせない存在だ。これに加え、1年生ながら団体3000mで6位入賞した北村光と、インターハイ県予選5000mで4位になった赤坂匠ら2年生コンビが主力を担う。

実力者が揃う今年のチームについて岩上和貴監督はこのように話した。「今年は実力的にもすごく充実している。県で勝てる力がありますし、そのために何をやっていかないといけないのかしっかりと見極めないとけない。勝負の年ですね」

チームの目標は県予選を突破し、都大路へ出場すること。そのために岩上和貴監督が一番大切にしているのが「社会に出て通用する人間育成」だ。

「陸上競技は、記録を伸ばすためにストイックに練習していく個人競技だから、組織という意識が芽生えにくいんです。だけどそういった社会性は生きるために必要。それに人間性を伸ばすことで、考える力も比例して伸びるので、競技力の向上にも自然とつながりますよ」

樹徳では毎日、昼休みの時間に短距離ブロックなども一緒に集まってミーティングを行う。チームの目標設定の共有や練習メニュー以外に、学校での私生活について話すことも多いとか。

北村は「中学のときは部活だけやっておけばいいかなと思っていただけ、高校に入ってからは生活も競技もリンクして考えるようになって、学校生活も競技と一緒にしっかりすればもっと変わっていくかなと思うようになりました」と高校入学後の心境の変化を話す。

さらに岩上和貴監督が就任した昨年4月からは、組織体制作りにも力を入れている。陸上部のキャプテンのほかに、短距離、中長距離などのブロック長をつけ、マネージャーのほかに主務の役割も作った。高校でも、こまめにやる意図は監督がいなくなっても、機能する組織を作るためだ。大澤は1年間でこのように振り返る。「最初は正直、主務、っていう役割がどんなのかわからなかったし、組織



の体制作りの大切さもよくわかっていなかった。でもだんだん仕事の流れや、やるべき役割分担もわかってきて、最近になって全体で助け合いながら、お互いに声かけや、全体での声出しができるようになってきた気がします」

岩上和貴監督の信条はこうだ。「個々のことは、記録を伸ばしたいからみんな一生懸命やるんです。それ以外のことをどうやって伸ばしていくかが競技力を伸ばすポイントだと思います」

岩上和貴監督体制になって2年目を迎えた今年。組織という地盤作りは、どのように選手たちの競技力向上へ影響を与えていくのか。群馬の駅伝界に新風を吹き込むための樹徳の挑戦は始まったばかりだ。



長距離チームのロードワークは、学校周辺の公道を使って行われるため、走る選手たちも周囲に注意を払いながら練習に励んでいる



体調に合わせて毎日のミーティング時にメニュー相談をすることも